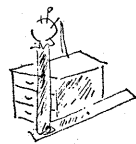


# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——（七）

津 守 真



前回、三歳児の二学期に、いろいろな子どもに観察されたことのひとつとして、劇あそびのはじまりのことを述べた。それは筋書きのある劇をするということではなくて、子どもは自分が体験したことを、おはなしの中で再体験し、さらに劇あそびとして再現することによって、何度も自分で確認してゆく作業であることを強調した。

その後、たまたま、附属幼稚園のM先生、K先生と話していたとき、三歳の後半になると、いつのまにか、子どもが劇あそびをしているというところに話が及んだ。劇あそびをしようというのではなくて、子どもたちは劇あそびをしている。そして、ひとつの話には、きつと子どもの喜ぶ個処が一、二か所あって、たとえば、だれかが川に落ちて、その人を助けるところになると、みんなが活気づいて、とびこんで助けにゆくという。話の全体とし

ての筋というよりも、子どもの体験にふれる部分があつて、子どもはそれを確認しているようだという。そして、M先生は、以前に研究会で三歳児のこういう劇あそびのことを話したら、三歳児にシンデレラの劇をするのは高度に過ぎるといふ批評を受けたけれど、三歳児のシンデレラの劇あそびは、シンデレラの劇をしているのではないのね、と言われた。私は丁度家庭の三歳児の劇あそびのことを書いたばかりだったので、幼稚園の先生の、何回もくりかえされる三歳児の体験の中に同様のことがあるのを知つて、私が書いたことが確かめられたように思った。

家庭の子どもAの、三歳児後半、年齢にすれば四歳の誕生日をすぎたところに顕著だったことについて述べてきたのであるが、そのころに顕著に見られたことがもうひとつある。それは、自分か

らよい子になろうとする傾向である。このことは、幼稚園の三歳児の二期にも見られる。とくに二期の後半になると、子どもたちがめっちゃくちゃなことをしなくなる。おとなのいうことにすぐに従うことが多くなり、手を焼かせることが少なくなる。そのことのよしあしは、別に問うことにして、Aに見られたよい子になろうとする傾向について、次に考えたい。

### いい子になること

Aが四歳の誕生日をすぎた秋から冬にかけて、Aは自分からいい子になろうとすることが顕著に見られるようになった。他の子どもに積み木を貸さなかったり、自分が遊んでいるものに他の子が手をつけたりすると、大声を出したり拒否したりすることが多かったことと比べると、一段の進歩のように思える。そのころには、貸すことができないときにいちいち言いやかせていたのでもなく、貸すようにさせてきたのでもなく、また、何もしないでいたのでもない。相手の子どももいるから、そこで一緒に困ったり、同じ物をさがしたり、両方が共にたのしめるように一緒に遊んだり、そして、あるときには理由を言って貸すようにしむけたりしてきた。そして、葛藤する間に入って困惑し、立往生するこ

とは、一日に何度もあるのが普通だった。そういうとき、私はいつも、そのときにはまだ相手のことが分からなくても、おとなと一緒に遊んでみんなが楽しめるようにしていれば、いちいち口を出さないでも、自分から相手のことが分かるようになり、道を見出してゆくようになることを信じていた。もちろん、だれもが私と同じように考えるのがよいなどとは思わない。だれも皆、性質も違うのだし、自分のやり方を見つけてゆくのがよいと思う。ひとつ明瞭なことは、一回ごとに言いきかせ、教えてゆかなければ教育ではないという風に考えると、教育ということをあまりにも形式的に、機械的に、直線的に近視眼でとらえすぎることになるうということである。

こうして、何がどこでどう作用したのかはわからないのだが、四歳の誕生日をこえたところから、この子どもは、他人の観点から理解し、自分をそれに合わせ、いい子になろうとすることが顕著に見られるようになってきた。

次に、その例をいくつか掲げる。

昼食のとき、Aはふと気がついて、向かい側に座っているOにいう。

A「どうしてOさん、左ぎっちゃなの？」

そして、自分の箸を持っている手と比べる。

O「ぎっちゃじゃないわよ、むこう向けば同じよ、ほら」

A「どうしてむこう向くの？ あたしはこっち向いてるのに」とふしぎがる。  
(11月20日)

これは、自分の左手は、相手から見ると右になるということを発見しかけたときの事例である。すなわち、自分の側からだけでなく、相手の側からの見方の認識のはじまりと言えよう。

A「お兄ちゃま、自分の妹には親切にしなければいけないのよ」という。

夜ねにゆくとき、Aはお兄ちゃまのところに「おやすみなさい」と言いに行く。

「お兄ちゃま、おやすみなさい。あたち、お兄ちゃま、とっても好きなの」  
(12月20日)

これも小さなあたりまえのようなできごとであるが、この子どもにとっては大きな変化である。兄は妹に親切にしなければいけないと言って、兄の側からの見方が認識されている。また、自分から兄のところに夜ねるときの挨拶にいたり、いつもけんかの絶えない兄のところに「好きなの」と言いに行ったりするのは、意識して、自分がこうするのがよいと思う行動をとることであ

り、それまでに見られなかった行動である。すなわち、Aは自分からよい子になろうと努力している。

朝、兄がP（Aの妹）の誕生日だと言って、Pにノートと鉛筆をプレゼントした。Aはそれをじっと見ていたが何もいわない。兄が「それ、ここにいったら」と、Aの「だいいなものいれ」にいったら、A「そこ、あたちのだいいなものいれるところよ、だけれど、共同にしようよ、きょうどう」と言う。AはPの誕生日だと張切っている。  
(12月30日)

それ以前には、自分のだいいな箱に妹のものをいれるというようなことは、Aにはがまんができなかった。それを共同に使うというように、自分の中に相手をいれる認識ができてきている。

Aが赤と黄のつみきで、うちを作っている。なかなか面白いものができた。Pがそばにいつて使いたがるが、Aは使わせない。Pは泣き顔になる。私はPをさそって、白木のつみきで作るようにした。Pが一寸その場を離れたとき、Aがきて、Pの使っていた白木のつみきを一杯にひろげて、うちを作りはじめた。Pはもどってきてそれを見て、「Aが使っちゃった」と泣き声になる。Aと一緒に使わせてあげなさいと言うと、Aは積み木を全部かか

えこんで、Pにさわらせない。』だって、あたし、両方使いた  
いんだもの」という。

(1月25日)

いい子になることができてきたAも、このような場面になると、妹といっしょに使うことができない。いい子になるということには、ある限度があつて、その限度をこえたと通用しないようである。一度いい子になることができたら、いつもいい子でいられるのではなくて、いい子にならないこととの交替のくりかえし  
のようである。

A「天国って、空にちかいんだよね」

兄「人間に見える天国は、四次元なんだよ」

A「いい子って、手づかみでたべないことでしょ、デパートに  
いったときも」

母「Aちゃんが、赤ちゃんのおもりをしたり、Pちゃんに親切  
にしたりするときもよ」

A「あたし、きょう、赤ちゃんのおもりしてあげた」

(2月2日)

Aは食卓で手を使って食べることが多かったので、手を使わな  
いでお箸でたべなさいとしばしば言われた。いい子になるという  
ことは、親や先生がその子に言ったり、要求したりすることと関

係が深いようである。母親が、赤ちゃんのおもりや妹に親切にす  
ることをいうと、すぐに自分が赤ちゃんのおもりをしたことを述  
べ、母親が言ったことに、自分の行動をあてはめる。つまり、意  
識の面でおとなの要求に合わせようと努力する。具体的なおとな  
と、具体的な行動が問題になっているが、これは次第に、より内  
在化されてゆくであろう。この会話には、先行する会話がある。  
そこでAは、「イエスさまって、神さまのお兄さんなの、それで  
お母さんが神さまなんでしょ」と言っている。神さまという目  
に見えない存在に関連する行為の規準と、母親とが混同されてい  
るが、内在化への方角を見ることができるといえる。

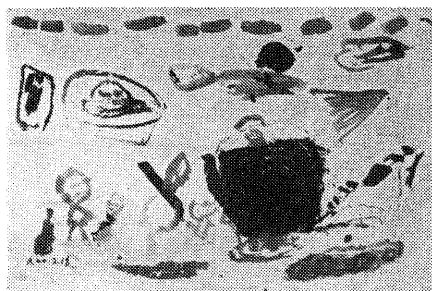
ここに掲げた事例は、いずれも、満四歳の誕生日の後数か月の  
間のものであり、幼稚園の区分でいえば、三歳児後半に属する。  
これらは、おとなからみていい子になったと思われる例であり、  
また同時に、子ども自身もいい子になろうとしている例である。  
おとなの期待や要求に従うとき、おとなはそれをいい子だと思  
う傾向があるようである。そしてそのことを疑ってみようとしな  
い。

丁度、同じ時期に、Aの描いた画をここに掲げて、そのころ

に、Aの世界に起こっていたであろうことを考えてみたい。(写真参照)

この絵は、家庭で描かれた水彩画である。これをかいたとき、最初にえのぐを使っていた兄が九枚もの絵をかき終わるまで、Aは長い時間待っていないければならなかった。いつもだと、えのぐを使う順番がくるまで待っていることができず、小さい子どもが何人も一時にえのぐを使うので、大騒動になるのだが、この日はAは静かに待っていたので、ずっと手がからなかった。

絵は主として赤と青で描かれている。中央の赤い大きなかたまりは、「せんしや」という。左の方に描かれている人の右側の方



は「おかあちゃま」である。「せんそうしてるの」という。中央上方に、横むきに青色で人が描かれ、「天使、せんそうでけがをしたの」という。赤いえのぐで、点々と滴をたらす。右上方に右向きに描かれているのは、一つはワシであり、一つはツバメである。そして一番上方に、紙のへりにそって、天の線(あるいは雲)が描かれる。(紙の大きさ90センチ×60センチ)

これを描いたときには、私はえのぐを使えるように周囲をととのえたりなどするの追われて、何を描いたのか見る暇もなかったが、後になって、この頃のAの様子を見直しなが見ると、意味深い絵であるように思う。

「せんそうしてるの」という言葉からもわかるように、画面全体が戦場である。描画を心の内面の表現と見るならば、これは内心の戦いをあらわしているといえるだろう。いい子になろうとするのには、子どもは内心の葛藤を戦わねばならない。自分の本来の野性と、おとなの要求に合わせようとする欲望との間の戦い、あるいは、地面から飛び上がろうするときの重力との戦いである。飛び上がった天使は「せんそうでけがをして」傷つき、赤色の血を点々と滴らせる。天使と一しょにワシとツバメも、右の方に向かを目指してとんでいる。いい子になるのには、子どもは内心の戦いをたたかい、傷つき血を流していることもあることを、

この画を見直すまで私はあまり考えたことがなかった。おとなは、子どもがよい子になったことを、成長したと言ってよろこぶ。しかし、そうなるために、子ども自身がどんなに幼い努力をしているか、何かを犠牲にしている場合もあるということを見ようとしな。それはおとなの目からは努力とは見えなくとも、子どもは大へんなエネルギーを使っているのだと思う。

だから、子どもがよい子になっていられるのには限度がある。その限度をこえるときには、もはやいい子になっていられず、妹につきみをかすこともできず、自分で独り占めにしがんばる。そういうとき、おとなはこわい顔をして子どもをにらみつける。ひとたびいい子になることができた子どもは、いつもいい子にしているのがあたりまえと思っているかのである。いい子にしていられる限度が破れると、おさえられていたものが爆発して、いい子とは逆の傾向が噴き出してくる。これがおとなにも子どもにも共通の人間の全体像ではないだろうか。

この画をかいてから十年後に、この同じ子どもがふともらした言葉。「あたしの心の中には、二人の自分があつて、ひとりがこうしなさいという、ひとりがこうしないというの」こうという言葉に出会ふと、またあらためて、四歳のときにも同じことがあつたのだと思う。

子ども、おとなも、いい子の顔をしていられるのには限度があるのだと思う。いい子にしていればいるほど次の瞬間には、いい子とは無関係な素顔の自分になっていなければいけないであろう。子どもはその両方をうまく使っている。幼稚園でいい子になっている子どもは、家に帰ると、その逆の行動を示すことをしばしば見る。また、幼稚園で粗暴でいうことをきかない子どもが、家ではいい子になっていることも少なくない。おとなは、その人によって、子どものどちらかの側面を引き受けることになる場合が多い。教師は、どちらかという、子どものいい子の面に接することが多く、その逆の面も、どの子にもある当たりまえのことであることを忘れがちである。親は、学校や幼稚園でいい子の生活をしてきたあとの反動の面を引き受けることが多いので、どんな子どもにも、いい子になろうとする側面があることを認識して信頼することがむづかしい。

子どもに、この両面があることを認識することは重要なことだと思う。子どもがよい子にばかりなっていたら、本来の自分らしさを發揮して生きることができないであらう。もちろん、外に顔を向けて、いい子になることも必要であるが、内に顔を向けて、自分の本領を出して生きることが、同じ程度に、あるいはそれ以上

上に必要であろう。

幼稚園で、三歳児の後半になると、おとなの期待に従って行動することが多くなり、全体が整然としてくるが目立つ。これは、子どもたちの成長の結果として喜ぶべき面もあるが、いい子にはなれない子どもたちの素顔の面が、同時にあって当たりまえだという認識がたいせつだと思う。人間のその両面が出て、生活の場となる。

もしも、幼稚園が、いい子の面だけしか出せないところになったら、整然としたいい子の姿だけしか見られないところになっていたら、幼児の生活の場としては、どこかに無理があると考えてよいであろう。子どもは、おとなから見えていい子になっているときもあるし、また、おとなの期待にそわない、理解の困難なことをするときもある。その両方の姿があって、成長がある。

人が社会の期待や要求にこたえようとする傾向が強くなりすぎると、忙しい現代においては、自分自身のありどころを見失う恐れがある。学校や塾のいろいろの先生の要求に沿うことを期待される子ども時代からひきつづいて、休む間もなく社会に押し出されて、人は自分自身を発見する暇がない。そこで、期待に沿って生きるか、あるいは反逆するかのいずれかになってしまふ。反逆

も、期待に沿うことの一面に他ならない。期待の度が強くなるほど、それは破壊的に作用し、自分自身をも破壊することもある。破壊的に作用しはじめたと見えたら、おとなは期待を放棄しなければ、回復に向かわないであろう。おとなにとっては、期待を放棄するということは、実にむづかしい作業である。期待や要求に沿うことを放棄するところから、人は自分の道を見出し、自分自身に対して生産的になりはじめる。

子どもにとっては、手を使ったり、体を動かす作業は、自分自身で楽しみつつ、次の活動を生み出す作業であり、本来、他人からの要求や期待とは縁のうすい性質のものである。それぞれの子どもたちの持ち分や、歩み方に応じて、自分でたのしめる生活を作ってゆくことが、周囲にふりまわされないで、着実に自分自身を見出してゆく道であろう。

(つづく)

